恐　羅　漢

明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰り、ずっとスキーの手入れをしていた。恐羅漢は標高一三四六メートル、西中国山地の主峰であり、天気が良ければ日本海や瀬戸内海まで見渡すことができる山である。また、恐羅漢の雪は(1)パウダースノーといって、スキーをするにはもってこいの雪質で、頂上付近からの眺めも最高だ。ひろしは、そんな恐羅漢でのスキーが大好きだった。それにもう一つ、ひろしにとって恐羅漢は特別な山でもあった。

ひろしの祖父は、恐羅漢スキー場の近くに住んでおり、幼い頃からよく遊びに行っては山の中を探検していた。冬はスキーで有名な恐羅漢だが、夏はブナ林に覆われ、所々には(2)ササユリや(3)ナルコユリなどの花も見られる。そんな恐羅漢の中でも、ひろしにとってお気に入りの場所があった。そこはちょっとした秘密基地のようになっており、恐羅漢周辺の山々を一望できる絶好の場所であった。

ある日、ひろしがいつものようにその秘密基地で遊んでいると、祖父がやって来た。

「ひろし、ここにおったんか。どうじゃ、ここから見る恐羅漢の眺めは。じいちゃんもお父さんも、小さい頃にはよくここに来て遊んでいたもんだ。」

「えっ、お父さんもここで遊んでいたの？」

ひろしは、びっくりすると同時に不思議な思いがした。

「恐羅漢はこのブナ林のおかげでたくさんの水を蓄えることができる。そして、その水は少しずつ柴木川に流れ込んでいき、それは、やがて太田川の豊かな川の流れへと変わっていくんだ。言わば太田川にとっては『母なる山、恐羅漢』ってところかの。」

「母なる山、恐羅漢？」

ひろしは、祖父のこの言葉が心に残り、恐羅漢に興味をもつようになっていった。

「明日は晴れるといいなぁ。だって、明日は中学校生活最後のスキー教室の日だからね。」と言って外の様子を見ると雪が降り始めていた。ひろしがその雪を見て、

「このぐらいの雪だったら、スキー教室をやっても平気だよね。」

と言うと、隣で新聞を読んでいた父は、降り続ける窓の外の雪を見つめながら、消防団員として捜索隊に加わった、数年前の恐羅漢での遭難事故の話をし始めた。

平成二〇年二月三日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、ゲレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、七人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに捜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。スキー場の人たちは七人の安否を心配し、一晩中ナイター用の照明を点し続けていた。

夜は明け、二月四日の朝となった。朝九時三〇分から始まった本格的な捜索活動は困難を極めていた。昨夜から降り続けていた雪は一メートル五〇センチに達し、恐羅漢自慢のパウダースノーでは、体が(4)かんじきを掃いていても腰付近までうまり、手で雪をかき分け、這うように蛇行して進むしかなかった。それに、昨晩からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は一メートル程度しかなく、恐羅漢をよく知る人でさえも方角を見失うほどだった。捜索隊は二次遭難を避けるために、それぞれの体を命綱でつなぎ前進を続けた。一歩間違えれば命をも奪われてしまう。もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった。行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、捜索隊の体力を消耗させていった。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれて捜索していた二つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

午前中の捜索活動を終え、捜索隊がもどった現地捜索本部では、疲労と絶望感の中、重たい空気が流れていた。そんな中、若い消防団員の一人が激しく吹雪く恐羅漢をにらみつけて言った。

「こんな恐羅漢は初めてだ。」

すると年配の消防団員が、かじかんだ手を温めながら、静かに答えた。

「いいやそれは違う。恐羅漢は昔からずっと、この地域の自然とともに変わらずその姿を横たわらせているんだ。何も語らずじっとな…。」

頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのだが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いた二名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してくる人がいたことから、もしかしたら今回

もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないかとも考えていた。それは、恐羅漢と共に生きてきた匹見町の人だからこそできる行動だった。早速本部にもどった消防団員二名は、翌日の捜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での捜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから二日目の夜、午後九時を過ぎたころだった。

日付は変わって二月五日の朝がやってきた。匹見町での捜索には、陸上自衛隊を中心とする約二〇名があたった。捜索対象になった広見林道では、降った雪の多くが林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルのようになっていた。地面には一五センチ程度の雪が積もっているだけだった。昨日の恐羅漢とは全く違い、優しささえ感じる別世界のものだった。

捜索を始めて一時間がたったところで一度休憩をとり、再び捜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目に映った。

すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「他は生きとるんか？」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかった。「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。間もなく残りの五名も無事発見された。

話を聞き終えたひろしは身震いをして、すぐに窓の外に目をやった。雪はやみ、月明かりが窓から差し込んできていた。それを見て、ひろしは少しほっとした。父は、明日のスキー教室を楽しんでくるように伝えたあと、ひろしに向かって

「大きいんだよ、恐羅漢は……。」

と言い残して居間に戻っていった。

翌日、恐羅漢はいつもと変わらず、絶好のスキー日和だった。

ひろしは、恐羅漢の頂上に立ち、しばらくぼんやりとあたりを見つめていた。その恐羅漢の風景は、今までとは少し違って見えていた。

「おい、ひろし行くぞ。」

友だちの声が聞こえてきた。

「ああ。」

と返事をして、ひろしはストックにぐっと力を入れ、恐羅漢の山を滑り降りていった。

【注】

（1）パウダースノーとは、水分が少なく、スキーなどに快適な雪質のこと。

（2）日本特産で日本を代表するユリである。地域によっては、ヤマユリと呼ぶこともあり、最近ではその数も減ってきていると言われている。

（3）山林や丘陵地などに自生するユリ科ナルコユリ属の多年草で、北海道から九州、中国や朝鮮半島に自生している。白い花が列をなしている容姿が、鳥を追い払う鳴子に似ていたため、ナルコユリと呼ばれるようになったとされている。

（4）かんじきとは、雪の上などを歩くとき、深く踏み込んだり滑ったりしないように、靴などの下につけるもののこと。